

おおさか
KEY
ワード
第53回



映画「大大阪観光」のラストシーン。「浪花踊り」と道頓堀界隈のネオンサインをコラージュして賑やかなこと。

いまも昔も光の街
世界ネオンアート・フェスティバルはどいつですやろか

道頓堀の「グリコ」の広告がリニューアルした。モダンズムを謳歌する昭和10(1935)年、戎橋南詰西側に初代の「グリコ」のネオン塔が建設される。高さ33メートル。初代通天閣(約75メートル)の半分にあたる巨大広告塔である。トレードマークの走者と「グリコ」の文字が6色に変化し、毎分19回点滅する花模様の電飾が飾った。戦後は昭和30(1955)年に二代目が再建され、ネオン下の特設ステージで人形のワニがピアノを弾き、人形劇やロカビリー大会が催された。今回の広告が6代目となる。

大阪名物の一つであるこの広告は、平成15(2003)年、大阪市都市景観条例による「大阪市指定景観形成物」に指定された。同時指定が、大阪市中央公会堂、大阪城天守閣、通天閣など観光地や、住吉大社、四天王寺、一心寺、お初天神など神社仏閣、道修町の旧小西家住宅、橋梁で桜宮橋、港大橋、菅原城北大橋など、大阪を代表する建造物ばかりである。

今回の6代目は、いままでのネオン管ではなくLED(発光ダイオード)に変わり、動画を映すことも可能となっている。省エネにも貢献するだろう。しかし、注文に応じて作られる職人技や、色彩の鮮やかさと暖かきをもつネオン管には独特の芸術性と郷愁があることも忘れられない。ネオンはフランスで開発され、大正元(1912)年のパリ万博で初公開されたときされる。それから十数年後には、大阪、特に「道頓堀行進曲」に「赤い灯青い灯」と歌われる道頓堀界隈は、ネオンや電球が煌々と光り輝く街となった。

昭和12(1937)年の大阪市電気局と産業部制作の映画「大大阪観光」(大阪市指定文化財)には、ぐるぐる回る道頓堀のカフェやキャバレーのネオン広告、明滅する劇場のイルミネーション、情報を伝える電光

掲示板(電気科学館と戎橋北詰の2カ所)が映し出されている。現在の交通局と関西電力の源流であるのが大阪市電気局で、映画は電力によるまばゆい光の世界を宣伝する。

道頓堀のネオンは、織田作之助の短編「雪の夜」にも登場する。「下味原町から電車に乗り、千日前で降りると、赤玉のムーン・ルージュが見えた。あたりの空を赤くして、ぐるぐるまわっているのを、地獄の鬼の舌みたいやと、怖れて見上げ」とあるのがそれで、モンマルトルにあるキャバレー「ムーン・ルージュ」の風車をイメージした道頓堀のキャバレー「赤玉」の風車のネオンである。その動く姿は「大大阪観光」にも登場する。

さらに戦後、「鉄道唱歌」を当世風のコミックソングで三木鶏郎作詞作曲の「僕は特急の機関士で」(昭和26年発売)では、歌の出だしで、「ネオン・サイン」の大阪と歌っている。

道頓堀と言っても賑わいの中心は戎橋付近にあり、東や西側には往年の勢いは無く、せっかく設けた川辺の遊歩道にも寂しい雰囲気がある。現代美術でも、ダン・フレイヴィン(1933~1996)のような高名な“ライト・アート”の作家がいたが、いっそのこと、モダン大阪が誇った絢爛たるネオンの世界を質を高めて再現し、未来に文化財として伝えるためにもアーティストを世界から集め、クリスマスの季節に「世界ネオンアート・フェスティバル」でも開催するのはどうか。

国や民族によってネオン管の色感も違うはずである。テーマは「グリコ」のランナーでもいい。遊歩道にずりとなりながら、川面に映る姿を対岸の遊歩道から眺めて“道ブラ”する。新しい大阪名所になりませんかと思う新年の夢でした。